「光学」の今後について

「光　学」編集委員長　佐　藤　　学
（山形大学）

「光学」は 1972 年に創刊され，その後 40 年以上にわたり，最新の光学技術を中心に，広がり続ける光学関連の技術分野の進展を読者に伝え続け，わが国の光学産業の発展に貢献してきました．今後もこのミッションは変わらないでしょう．

時代はまさに進化中の高度情報化社会で，手のひらサイズの機器で，誰でもいつでも地球の裏側の人とやりとりができ，多様なコミュニティーの構築や，さまざまな情報が入手が可能となっています．この時代に求められる「光学」の役割としては，まずいかに読者の必要な情報をスマートに届けるかでしょう．現在，編集委員会は各分野の方々で構成され，企画内容を十分議論し，特集企画をお届けしていますが，限られた条件で読者のニーズを的確に把握してお届けすることはそう容易ではありません．外国の光学会の雑誌も参考になりますが，科学動向や社会ニーズなどを十分検討し，距離やバランスも考慮して進める必要があります．届け方では，毎月「光学」が送付されていますが，最近ではホームページも便利に整備され，記事のファイルが取得できるようになっています．

将来的には，個人のニーズに合った細やかな情報提供が望ましいと思われます．メールやホームページ，そして紙媒体も読者と学会を結ぶメディアと捉えて，読者からのニーズを集約し，いかに個人の希望に沿った情報を早く届けるかが大切です．例えば，学会からの提供情報を読者がネット上で選択して，定期的に受信することなどが考えられます．もちろん，これは日々送られる不要なメールとは全く異なります．

このように，“時代の道具”を使わない手はなく，種々の情報媒体の複合的な運用に新しい会員サービスを探るのは時代の流れでもあるかと思います．しかし，一足飛びとは行かず，さまざまな検討や段階的な試みから，時間を要します．何より読者の声を聞いて，安全性を優先させ，読者の利益を守る視点が重要です．

Optical Review の今後

Optical Review 編集委員長　中　楯　末　三
（東京工芸大学）
Optical Review 出版委員長　小 野 寺　理 文
（職業能力開発総合大学校）

Optical Review（OR）は創刊から昨年で 21 年を迎えました．図 1 は，創刊（Vol. 1）から昨年（Vol. 21）までの出版論文数の推移を示しています．各年の論文数はおおむね 100 件程度で推移していますが，海外からの投稿が近年 30 件を超えるようになり，国内の投稿論文数を上回るようになってきています．おもにアジアからの投稿が多く，アジアにおける光学に関する国際論文誌として OR が着実に知られるようになったといえます．2010 年から 2014 年までの論文の採択率は約 67% で，比較的厳しい審査が行われています．インパクトファクターは，0.55（2010），0.66（2011），0.70（2012），0.55（2013）であり，堅調な推移を示しています．OR の特徴として，国内で開催される国際会議に合わせて Special Issue を企画することがあげられます．これは日本における光分野の活発な国際的活動の表れであり，その成果を論文として発表する場として OR が一翼を担ってきました．

新法人設立を機にこれまでの OR の内容を引き継ぎながらも，新たな Optical Review に生まれ変わります．新生 OR では完全電子化を実現し，投稿から発行までの期間の短縮を図るとともに，投稿料の値下げを実行し，インパクトファクターの 1.0 超えを目指すことによって，さらに多くの方から投稿していただけるよう努力する所存です．新たな第一歩が始まります．会員諸氏のご投稿とご支援をより一層お願い申し上げます．

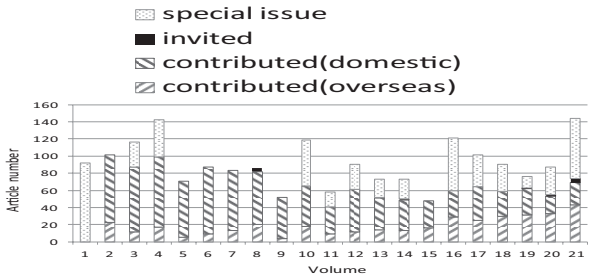

図 1　Optical Review の投稿論文数．